

**国土審議会北海道開発分科会
第9回基本政策部会議事録**

平成18年12月22日

国土審議会北海道開発分科会第9回基本政策部会議事次第

日時：平成18年12月22日(金)

10:00～12:00

場所：中央合同庁舎2号館低層棟
共用会議室2A・2B

1. 開会

2. 議事

(1) パブリックコメントの募集結果及び提出された意見への対応について

(2) 最終報告について

(3) その他

3. 閉会

(配付資料)

資料1 国土審議会北海道開発分科会基本政策部会委員名簿

資料2 北海道総合開発計画「第6期計画の点検と新たな計画の在り方中間とりまとめ」に関するパブリックコメントの募集結果～ボイス・レポート～(案)

資料3 北海道総合開発計画「第6期計画の点検と新たな計画の在り方中間とりまとめ」に関するパブリックコメントー意見の概要ー(案)

資料4 最終とりまとめ作業ペーパー

参考資料1 北海道総合開発計画「第6期計画の点検と新たな計画の在り方中間とりまとめ」に関するご意見

国土審議会北海道開発分科会第9回基本政策部会

平成18年12月22日(金)

開 会

高松参事官 それではただいまから、国土審議会北海道開発分科会第9回基本政策部会を開会いたします。

本日は、皆様お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。本日の部会は13名のご出席を予定しております。私は本日の事務局を担当いたします国土交通省北海道局参事官の高松でございます。どうぞよろしく願いいたします。

これ以降の会議の進行につきましては、南山部会長をお願いしたいと存じます。どうぞよろしく願いいたします。

南山部会長 皆さんには年末の大変お忙しい中ご出席をいただきまして、ありがとうございます。

それでは今日の議題、お手元の議事次第にあります、「パブリックコメントの募集結果及び提出された意見への対応について」、それから「最終報告について」であります。中身がずっと関連しておりますので、一括して事務局からご説明をしていただき、その後、皆さんからご意見をいただきたいと思っております。

それでは、お願いします。

高松参事官 それでは、説明させていただきます。

資料2「ボイス・レポート(案)」、資料3「意見の概要」、それから、資料4「最終とりまとめ作業ペーパー」、これらの資料についてご説明させていただきます。

まず、資料2でございます。最初に、目次でございますが、中間とりまとめに関するパブリックコメントをさせていただきました。まず、1ページに「パブリックコメントの概要」をまとめさせていただいておりますが、10月16日～12月1日までの47日間、パブリックコメントということで、意見の募集をさせていただきました。国土交通省のホームページなどを使わせていただいたところでございます。たくさんの方々からのご意見をいただくという趣旨でございまして、マスコミ等へのご説明などもさせていただきました。後ろに「参考資料」として、切抜き記事を付けさせていただいておりますが、精力的にPR活動を行いました。その結果、円グラフにもありますとおり、受付件数で1,062件のご意見をいただいたところでございます。殆どが北海道内からのご意見でございます。なお、道外からは1.1%(12件)でございます。4ページ目には、意見の種類についてまとめさせていただきました。1,062件でございましたが、お1人の方でたくさんのご意見を書かれた方などがおりまして、総数として意見の数で分解しますと1,800件弱になります。中間とりまとめの目次の構成に従って、どの部分にどのぐらいの意

見があったのかをまとめさせていただいた資料でございますが、総じて、第 章、第 章、第 章の3つの章立てから申し上げますと、第 章の各論についてのご意見が非常に多かったということでございます。それから、第 章の一番最後のところ、 の3に「北海道開発の在り方」基本認識、意義などについてまとめているところでございますが、このへんについてもいろいろなご意見がございました。それから、第 章の点検については、それほど数ではなかったと、このようなことでございます。

次に6ページ以降で、意見とその対応についてまとめさせていただいております。最終的には、6ページ以降の6～20ページまでが、国土交通省のパブリックコメントの対応ということで、この様式で公表することになっております。このような定番の様式に落とし込んだのが6ページ以降の資料でございます。これだけだと、本文のどこに対してどのような意見かということが見えにくいいため、それを改めて資料3に、中間とりまとめの本文と意見を対比できるような様式として作成しております。資料3と資料2の6ページ以降と両方お開きいただき、詳細な内容についての説明をさせていただきたいと思っております。

資料3を見ていただきまして、まず1～4ページでございます。先ほど申し上げましたように、第 章で申し上げますと、北海道開発の意義、開発の在り方、ここについての意見が多かったわけでございます。まずは、中間とりまとめの「基本認識」で、北海道開発に関していろいろな批判や意見についてでございます。時代遅れじゃないか、あるいは特別扱いする必要はないのではないかと。それから、地方にまかせればよいのではないかとというような意見を例示させていただきましたが、そうではないというご意見が寄せられております。ご意見の概要については、1～2ページに幾つかまとめさせていただいております。時代遅れ論と特別扱いする必要はないというこの2つについては、そのようなことはない。この意見・批判は不当である。という意見が多かったわけでありまして。3つ目の地方にまかせればよいのではないかというくだりに関しては、これからは地方の時代であるというようなことで、賛否両論のご意見がございました。

3～4ページの「北海道開発の意義」でございます。ここもご意見が非常に多かったわけでありまして。簡潔にまとめ過ぎてしまったかもしれませんが、特に意見が多かったところは、上の（北海道開発の意義）の3つ目のパラグラフの「このような「開発」の今日的意味合いを踏まえると……」についての意見、それから、（北海道総合開発計画策定の意義）に関しては、下の2つの意見、新たな開発計画を策定するには意義があるという賛成意見が多かったことでございます。第 章については、特徴的にはこういう意見の状況でございます。

資料が飛びますが、資料2でございますが、そういう状況を踏まえて、6ページの細かいところは省略いたしますが、8ページで同じような意見の構造について左側でその意見の中身について紹介させていただき、対応（案）でございます。その大方の意見は、今の中間とりまとめに書いてある本文で読めるのではないかと考えております。、ここでは、対

応にも書かせていただいております中間とりまとめの文章を改めて掲載させていただいております。特に8ページに関する限りは、この中間とりまとめのペーパーの考え方で最終(案)として整理して差し支えないのではないかと考えております。

引き続き、第 章を飛ばしまして、第 章についての話を説明させていただきたいと思っております。資料3で申し上げますと、5～6ページでございます。資料2で申し上げますと、10ページに第 章以降の対応方針もまとめさせていただいております。各論の第 章で申し上げますと、まず最初に、「食料供給力の強化と食に関わる産業の高付加価値化・競争力強化」というくだりがあります。主にいただいたご意見としては、ここでアンダーラインを引かせていただきましたとおり、1つは、我が国の食料安全保障を支える観点からと、2つ目、北海道の食料基地としての役割でございます。それから3つ目として、農地・農業用水・農業技術の確保等、このような3つについて意見がございました。食料安全保障に関する部分につきましては、大方この意見については賛成意見が多かったということでございます。それから の食料基地につきましては、特段、中間とりまとめではそこまで踏み込んで書いておりませんが、食料備蓄というキーワードが幾つか出てきたということでございます。それから の農業関係の整備につきましては、各地域の実情に則した整備が今後とも必要という意見が多数出てきたところでございます。この部分につきましては、資料2の10ページで、もう少し詳しく件数も入れ、まとめさせていただいております。しかし、いろいろなご意見は賜ったものの、今の中間とりまとめの中の文章でおおよそその全容については読めるのではないかとということで、修文なしという整理をしております。資料3に戻りますが、食に関しては、2つ目の高付加価値化、それから競争力の強化と、こういう観点でまとめたところでございます。ここについては、同じく付加価値に関して、経済的価値の高い生産の振興、 として農水産業と食品産業間の連携に関するところ、そして食の安全性に関する国民的関心の高まり、安全で高品質な農水産物や食品づくりを進め、魅力ある北海道ブランドを確立。こういったところにご意見が幾つか出ております。ここも多様なご意見がございましたが、総じて全体について賛成であるというご意見が多数ございました。それを踏まえて、資料2の10ページでございますが、中間とりまとめでは、農水産業と食品産業間の連携ということで、連携はこの2つに限定していたわけですが、もう少し教育機関も含めた多様な連携が必要なのではないかとというようなことを踏まえて「等」を入れるなど、少し幅広くいろいろ出てきたご意見に対応するような構造にするため、修正しております。

資料3に戻りますが、9～10ページは、食に関連するところでございます。中間とりまとめでは、第 章にまとめたところでございますが、少し担い手の問題についてもご意見がございましたが、そこについても関連ということで9～10ページにまとめさせていただいております。この部分につきましては、資料2では、6ページで、その担い手確保についてのご意見もあったことを記載させていただいております。

資料3の11～12ページに移らせていただきます。こちらは観光でございます。観光の問題につきましては、特に観光地づくりのところにご意見がございました。資料2で申し上げますと、11ページでございます。ここでも多様なご意見があった中、特に、今私どもで説明させていただいております「シーニックバイウェイ」についてのご意見がたくさんございました。是非、観光政策の一つとして、これをさらに進めるべきであるというご意見が多ございましたので、その部分については、中間とりまとめを青字のように、少し追記するというように対応させていただきました。

引続きまして、資料3で申し上げますと、「人と技術による競争力ある成長期待産業の育成」でございます。資料2では、12ページでございます。ここはかなり幅広い分野をまとめているところでございます。資料2の12ページは、グローバルから森林の話、そして条件整備、産業立地基盤、人材育成、金融機能についてまとめさせていただいております。それぞれの分野について多様なご意見があったわけでございますが、基本的には、中間とりまとめも相当幅広く書かせていただいておりますので、概ね頂いたご意見を読めるのではないかと。対応(案)では、今の中間とりまとめの原文を転記させていただいております。

次に、資料2の13ページが環境でございます。資料3で申し上げますと、25～26ページでございます。環境につきましては、自然との共生、循環型社会の形成促進、エネルギー対策と、こういう3つの柱で中間とりまとめを整理させていただいているところでございます。ここも、ご意見はいろいろございます。例えば、25ページで申し上げますと、自然との共生という前半に関して、これは開発をやめて自然環境保護をやるべきであるというご意見から、それぞれの施策みたいなものをもう少し細かくしたらいいのではないかと、こんなアイデアがあるのではないかとというご意見も含めいろいろございました。特に25ページの ですが、リーディングプロジェクトを推進する必要があるという前の文章が、道づくりの推進、川づくりと、それから湿地の話、港づくりとか、農業農村整備事業とか、事業を縦割りで列記しているだけじゃないかと、こんなご意見もございました。資料3で申し上げますと、27～28ページのエネルギーについては、多様なエネルギーで、ここに列記している以外のエネルギー源に関するご意見、それから、もう少しサハリンみたいなものをしっかり書いてもいいのではないかとというようなことも含めて、エネルギー関係についてご意見をいただいております。資料2の13ページに戻りますが、先ほど私が申し上げました縦割り感が出ている文章は、列記するのはやめて、例示を1個だけにして、リーディングプロジェクトの推進のコンセプトが総合的なものだということができるような文章表現に直すということ。それから、エネルギーでいきますと、都市交通システムで、いろいろな北海道の実情を踏まえて、全国のCO2の焼き直しみたいなものではなくて、少し特徴を表していくというようなことで、文章を追記するというような修正を考えさせていただきました。

次に、地域づくり・まちづくりでございます。資料3は29～30ページ、資料2は14ページでございます。資料3の29ページの一番下のパラグラフで、札幌市を中心とする都市圏については、グローバル化の進展に対応した云々と。ここに対して反論されているご意見が幾つか出ております。札幌一極集中のようなことを懸念され、反対だというようなご意見が出てきております。また、30ページでございますが、集約型都市構造への転換についても、同じようにコンパクトシティ、コンパクトなまちづくりについて言及しているところではあります。コンパクトシティ、集約型都市構造への転換という部分については、反対だというご意見と、コンパクトシティについては賛成だというご意見の賛否両論があるところでございます。31ページですが、これも地域づくり・まちづくりの部分でございますが、情報通信の話がどこにもないということで、情報通信をしっかりと書いてくださいと、こんなご意見がございました。資料2の14ページの整理でございますが、札幌圏などの都市圏に関するところでありまして、札幌市を中心とする都市圏についてという文章はそのままとしながら、その他の地域についても、同じく札幌都市圏との連携によって相乗効果を生み出していくんだと。あるいは、広域的な生活圏の活力増加につながるような地域間の連携強化や、地域からの発信力の向上を図らせてもらえるんだというようなことで、文章を札幌、それ以外というところが少しわかるような追記をしてはどうかというような整理。それから、コンパクトシティ、まちづくりについてであります。今回の私どもの立場でこれを全部決めるということではなく、もう少し地域が自ら考え、自ら行動するというような都市再生にある文言ではございますが、そのあたりを追記する。それから、田園コミュニティのところでは、情報通信環境についてのコメントを付け足す。このように整理をし、まとめさせていただいております。

次は、モビリティの問題であります。資料3の33～34ページ、資料2の15ページでございます。特に34ページの「広域交通ネットワークの構築」で申し上げますと、その基幹的なネットワークは読み取れるわけではあります。生活道路みたいなものをさらに追記して欲しいと。それから、新しい交通機関として検討中のJR北海道で行っているDMVのようなものを書き足してはどうかなどのご意見が出ております。それから35ページであります。特に「冬期交通の信頼性向上」で、例示としては「航空機のさらなる安定運航の確保等、冬期を含めた交通ネットワークの信頼性向上に」という文章に対して、道路のことがちゃんと書かれていないので書いてくれと、こういうご意見がございました。そういうご意見を踏まえて、15ページでございますが、概ねいろいろなご意見は読み込めるのではないかと。冬の道路交通の話は、幾つか対策を付け加え、このような修文でまとめさせていただきました。

37～38ページ、39～40ページ、ここが安全・安心に関するところでございます。資料2の16ページでございます。ここにつきましては、一つには自然災害に備える防災対策の推進でございます。意見の概要としては、安全・安心はしっかりやってくれと、こ

ういうご意見が多かったわけでありませう。他には、ここで例示されている活火山で樽前山と駒ヶ岳でございますが、それ以外の火山も忘れるなというご意見。それから、物流ネットワークとか人流ネットワークについても、樽前山と駒ヶ岳に特化したように読めるのではないかということで、前半のネットワークの信頼性をもう少ししっかり書いて欲しいというようなご意見がございました。それから、治水対策も書いてくれということがございましたので、16ページでは、治水対策とか交通ネットワークの構築を少し付け加えてございます。それから活火山もほかの火山も読めるようにするというような整理をさせていただきます。

39～40ページでは、特にテロ・セキュリティ対策で、国際交流窓口である港湾・空港における保安態勢のようなものを整備、強化等、テロ・セキュリティ対策の強化を進めることが必要であるという原文に対して、もう少し原発の強化も付け加えるべきではないかというようなご意見もございました。テロ・セキュリティ対策に関しては、もう少し幅広く読めるような書きぶりに修正するというので修正案を考えたところでございます。

続いて41～44ページの北海道開発の進め方でございます。資料の17ページ以降でございます。ここもいろいろご意見をいただいたところでございます。特に41ページの「多様な主体が共に進める北海道開発」では、国とか地方とか住民とかNPOの多様な主体がビジョンを共有しながら、連携・協働していくことが必要であると。こういう文章に対しては、それぞれいろいろな立場から、例えば国のリーダーシップを期待するんだと、国のところを特徴的に読んでおられる方もおれば、これからはもっと地方が中心となった連携・協働が大切だというご意見。それから、住民とかNPOの立場から、そういう方々の活動に国や地方公共団体が支援していくんだと、そういう読み方をされている方、あるいは「等」ではなくて、企業というものもしっかりその役割を位置付けるべきではないかというようなご意見。それぞれの観点から、総論としては連携・協働はみんなでやるべきだと。連携・協働をやるにあたって、どこにその軸足を置くのかは、かなり多様なご意見をいただいたところでございます。文章では、その実現に向けて責任を持って連携・協働していくというようなこともございましたが、もう少しその役割みたいなこともしっかり書いてはどうかというようなご意見がございました。そういったことからこの連携・協働に関しては、17ページにありますとおり、役割という言葉は付け加えさせていただきましたが、連携・協働の在り方については、もう少しこれから詰めていく余地を残しておいたほうがいいのではないかとということで、文章を付け加えさせていただきました。また、企業という言葉も入れさせていただきました。

次に42ページの投資の重点化・効率化でございますが、これはいろいろご意見をいただいたところでございますが、概ね原文で読めるのではないかと思います。特に42ページで申し上げますと、「計画策定から実施、点検・評価、計画へのフィードバックというサイクル」が2つ目のパラグラフにあります。ここで指している計画は、北海道総合開

発計画を意識して提案されたご意見もあれば、ここに書いてある計画は、もう少し狭い意味の何か事業計画みたいなふうに捉えてご意見をいただいている方等々が幾つかございます。どういうふうにマネジメントをやっていくのかというようなところは、議論をもう少し掘り下げなければならないと感じたところではございます。そんなところが特徴的なところではございます。特に17ページにありますとおり、今のところは修文なしで整理させていただいております。44ページは、北海道イニシアティブについてのいろいろなご意見がございました。

最後に「多様性のある道内各地域の姿と隣接地域等との連携」については、先ほど景気の話、地域構造の話等と同じように、一つには、この2つ目のパラグラフにあります。その地域の特性に応じて地域の果たす機能に着目した地域構造の検討、それから、我が国に貢献する北海道の多様な姿、このようなことで北海道を一つとして捉える、あるいは北海道の中をまた幾つかの圏域みたいな地域構造に分けて考えるというようなことについていろいろなご意見がございました。自分たちの地域はこういうふうにあるべきなので、こういうことも書いてくれなど、多数のご意見をいただいているところでございます。それから、後段にありますように、一つには青函との交流、それからサハリン、北方領土、こういうほかの隣接地域との関係でございます。ここについてもいろいろなご意見がございました。特にサハリンとの交流などについては、住んでおられる方などがもう少しサハリンとの交流に地域としての役割があるというようなご意見など、参考になるようなご意見をたくさん賜ったところでございます。そのようなことを念頭に置き、18ページでございますが、一つには青函交流を、青函と言ってしまうと狭く誤解される可能性があるため、もっと広い東北と北海道というような連携という表現ができないかということにつきましては、その意見を採用させていただきました。あるいは、今私が申し上げたサハリンあるいは北方領土以外にも、もう少しアジアとか、いろいろな国外との連携も記述すべきというところにつきましても採用させていただいたところでございます。

最後に、資料2で申し上げますと、19ページにそれ以外のその他意見という、中間とりまとめのどのページというよりも、それ以外にいろいろ触れられたもののうち特徴的なものを少しまとめさせていただきました。パブリックコメントそもそも、あるいはこの資料のわかりやすさについてもいろいろございました。カタカナとか専門用語とかわかりづらいうご指摘もたくさん賜ったところでございます。それ以外には、道州制についていろいろご意見をいただいております。ここで言っている道州制は、道州制特区の道州制を指してみたり、そもそもの道州制を指してみたりということで千差万別ではありますが、概ね道州制の推進に賛成である、その方向にもう少し軸足を変えていくべきではないかというご意見。それから、道州制推進にはやはり疑問がある、もう少し慎重に考えてほしいというご意見。ここは賛否が分かれたところでございます。その他、次の20ページですが、北海道開発局に関するご意見。もっとしっかりしろ、頑張れと、そういうエールをい

ただいたようなところも幾つかございます。それから「社会資本・公共事業について」は、たぶんこのご意見は建設業界の方々のご意見だろうと思いますが、公共事業が縮減されて、建設業が衰退していくのは困るというようなこと。それから最後に、北海道の自立の在り方について、もう少し記述すべきと、このようなご意見がございました。

資料2で申し上げますと、遑って6～7ページと9ページは、説明を省略させていただきましたが、細かいところのご意見が出ております。修正すべきところは修正し、資料2をまとめさせていただいたところがございます。

ご説明が不十分かもしれませんが、おおよそこのような考え方で対応方針の整理は、青字になっているところが中間とりまとめの文章を修文するということでございます。今の青字のところに則して、資料4という「最終とりまとめ作業ペーパー」を用意させていただいておりますが、これは中間とりまとめについて、今の対応(案)を文章化すると、こういう「最終とりまとめ作業ペーパー」になるということでございます。資料がいろいろあり、誠に恐縮ではございますが、おおよそパブリックコメントの概要をこのような形で整理させていただいたところでございます。

以上です。

南山部会長 ありがとうございます。

皆さんからご意見をいただきたいと思いますが、非常に多くのパブリックコメントをいただいたということで、しかも、内容が非常に多岐にわたったということで、整理するのも大変だったと思います。資料自体も非常にボリュームがあり、中身が錯綜したような姿になっていますので、コメントをしていただくのも大変だとは思いますが、焦点としては、特に、コメントがあったものに対する対応の在り方について、事前のごらんになった資料3のコメントそのものに対するご意見、あるいは対応の在り方についてのご意見、特に対応の在り方についてのご意見をいただければ幸いです。

今日は、できれば皆さんにご意見をいただきたいと思っておりますので、嵐田委員から順にお願いしたいと思います。

嵐田委員 北海道副知事の嵐田でございます。

まずもって、昨日ご提示いただいた北海道開発予算につきまして、北海道等の事情を盛り込んでいただいた予算内示をいただきまして誠にありがとうございます。しっかりと北海道の社会資本の整備に努めてまいりたいと考えてございます。

今、ご説明のありましたパブリックコメントの件でございます。資料2の14ページ、の「今後の北海道開発の取組の方向性と進め方」の中の都市圏への一極集中の問題とコンパクトなまちづくりの2点についてお話をさせていただきます。

北海道も、今、新しい総合計画の基本的な考え方につきましてパブコメを行っている最中でございますけれども、その中におきましても、今後、地域政策については、計画推進上の大きくりの見地で考えていくこととしているところでございます。こうした中で、1

つ目の道央圏の一極集中につきましては、今後、札幌市を中心とする都市機能や産業の集積が本道全体に及ぼす役割について、北海道としてもしっかり検討していきたいと考えてございますが、いずれにしても一極集中の問題につきましては、十分考慮していかなければならない課題と受けとめてございます。そういった意味で今回の中間とりまとめの修正につきましては、札幌市を中心とする都市圏についての原文に、その他の地域に関する記述を追加するという整理であり、私どもとしては賛同したいと思っております。

2点目は、「コンパクトなまちづくりについて」でございます。道といたしましては、この7月に「コンパクトなまちづくりに向けた基本方針」を策定いたしまして、安全で快適な都市生活を維持可能とする都市の構築、あるいはまちの中心に人も施設もある程度まとめていくといったことも必要ではないかということで、そのような取組を進めることとしております。今後の人口減少や少子高齢化社会、さらには広域分散型の北海道の社会構造を踏まえれば、現状の行政サービスを維持するためにも、コンパクトなまちづくりが必要なことと考えてございます。そういった意味で、14ページの中段にございますような修正につきましても、私どもとしては賛同したいと思っております。

以上でございます。

南山部会長 ありがとうございます。

それでは、加藤委員をお願いします。

加藤委員 札幌市の加藤でございます。

多区域にわたる内容をおまとめいただきまして、事務局の皆さんのご努力に感謝したいと思います。

14ページで相對峙する概念の賛否が明確に出てきたことがございまして、整理は私はこれで結構かと思うんですが、そのときに見出しの「札幌市を中心とする都市圏の……」というこの辺りはちょっと工夫したほうがいいのかなと思います。我々が一人勝ちみたいなふうな言われ方をする都市なものですから、「札幌市」というのが適当かどうか。例えば「道央圏の機能強化と他地域との連携」だとかというふうな言い方のほうが、この場合はふさわしいのかなといったような気もいたします。そのへんをご意見として申し上げたいと思います。

南山部会長 ありがとうございます。

では、狩野委員をお願いします。

狩野委員 まず、私こういった委員を初めてさせていただきましてね。こういう調査の仕方をするんだなというのについて感想を申し上げますと、1,062件で、道外の意見が12件ですというのは、本州の方はあんまり関心を持っていただけてないのかなというのが1つありますね。

それから、先ほど、建設系のご意見じゃないかというお話がありましたけれども、どういふ方々がこの意見を出しているのか、おそらく官庁とか、いわゆる道庁の方々なんかが

多いのかなとかですね。結局、身内の方が多いのかなとかね。悪く言えば、タウンミーティングなところに...とか、そのあたりを少しバックデータとして調べておかないといけないと思ひまして。また、意見が北海道特有、ユニークな地域に対するご意見と、ほかの地域でも同じことじゃないかというのを総別しておかないといかんじゃないかなと一つ思ひました。

大きく言えば、そういうところなんですけれども、例えばこの資料2で言ひますと、最初のアイヌの方々のことなんかは非常に賛成いたしします。それから、冬期集住なんかも、いわゆる社会的弱者に対してどうするんだと、それを経済的にやるんだとか、そういう配慮があるんだと思うんですが、そういう文章をどこまで書くかは別にしまして、よく知っておかないいけないと感じました。

北海道産業についてですが、北委員がいらっしゃいますが、奈井江町には非常に優れた工具メーカーがあるんですよ。私、スウェーデンみたいところで特殊鋼があったり、あそこはボルボという自動車を年間45万台つくったりしているんですけども、そういうようなところを見習って、特殊な良い地域に北海道全体がなっただきたいと思ひます。

それから8ページ目は、北海道を特別扱いするかどうかという問題につきましては、狭い日本という常識の中では、北海道は異質な空間ですので、やはり特別扱いでもいいんじゃないかなと思ひますので、これからもしっかりやっただきたいと思ひます。

そのほか、コメント、対応も大変いいと思ひますが、11ページで、観光をしっかりやるんですが、いつも天気がいいとは限らないわけです。雨のときでも楽しめるようにとか、リピーターが来るような、しっかりしたこういうものを織り込んでいただければ、こういうところは大変いいなと思ひています。

それから12ページで、人材についても、現在いろいろなお意見があったので、その意見と同じところを言っていると思ひますが、まだまだ北海道からは人材は流出していると思ひますので、職をたくさんつくってあげたいと思ひています。

14ページでの都市圏の一極集中についてですけども、札幌といういいエリアに、加藤委員が言われまされたように、旭川も苫小牧も、ひよっとすれば室蘭もおそらく一つのエリアだと考えれば、そのぐらい広い範囲内に集中していると思えば、そう目くじら立てることもないなと思ひますので。そうは言うものの函館とか、網走とかはちょっと遠いかな。それは行政そのものですから、道民の幸せのためにこういう「要検討」としていただければいいなと思ひました。

あとはそういうところですが、最後17ページごろの開発ですけども。私たちが見ますと、北海道は比較的民主的なところなんです。企業としては、特に昔は居心地よくなかったんじゃないかなと思ひます。今はどんどん努力されて、リベラルな考えが入ってきていますが、要は、道民の意識を甘えた気持ちにならないようにしなければいけないというのが最後の意見であります。自分たちで何でもやっていくと、そういうような方向に

なるように、道庁と開発局が連携されてやっていただきたいと思います。

ちょっと長くなりました。

南山部会長 ありがとうございます。

それでは、川島委員お願いします。

川島委員 私はそれほど今日は……。これでよいのではないかというぐらいしか意見はないのですが。私もこういう委員はそれほどやっているわけではなくて、パブコメがこんな数たくさん来るんだなというのは、正直結構驚きました。特に第 章に1,000件以上集まっていて、この数に対してどういう比重を持たれるのかなというのが率直な疑問というか、数の重みはそれなりにやっぱり考えるべきなのではないかと。

もう一つ率直な感想ということで言いますと、パブコメがこれだけたくさんいただいているわりには、訂正ないしはこれを受けての修正のところは、かなりミニマムに抑えられているのかと見受けられました。ただ、変えなければいけないというものでないでしょうから、これはこういうものなんだと言え、そうかなと思いますが、パブコメを出された方々は、このパブコメに対しての修正(案)を見たときにどう思われるのかなというようなところが、純粹に感想というところであります。全体としては、こんな感じでよろしいのではないかと思います。

あと最後のところに、建設業からの意見でしょうかというようなご意見で、20ページにあった、公共投資が減っては困るというご意見だったと思いますが、いきなりやるとショック死してしまうので、急激な変化は難しいのかもしれませんが、こういうところは対象を変えていかないと、いつまでたっても変わらない北海道という形になって、やっぱりこういうことは変えていくべきなんじゃないかなと感じています。

以上です。

南山部会長 ありがとうございます。

それでは、北委員お願いします。

北委員 それでは、私から感想を申し上げたいと思います。これだけ多くの方々のパブリックコメントをいただいて、きちっと整理した事務局に敬意を表したいと思います。

流れとしては、大体我々が話した流れとそう多く乖離がないなという印象をまず受けました。そこで、申し上げておきたいと思いますが、14ページ。道央圏が、特に札幌を中心とした一極集中というお話がございます。このことを私どもも、ある面では住みやすさを追求して、自然の流れとしている可能性も高いわけがございます。特に高齢者が、高齢者マンションが札幌にどんどんできておりまして、そちらに人口が集中して、民族の移動と言ってもいいぐらい移動して行く。これはなぜかということ、地域医療が非常に不十分である。地域にいると暮らしぶらい。そういったことが不安材料になって、一極集中の様相を呈する。逆に、札幌市が困るのではないかと。副市長の加藤さんがおられますが、そういう人たちがどんどん集中してきて、ゆがみが出てくる可能性が政策の中に出てくる可能

性がある。したがって、これに関しては、もっともっと地方が目を開き、お年寄りも住んで、本当に誇りを持てる。そして、保健・医療・福祉等も、確かにだんだん医者もいなくなり、いろいろな面で施策を追求してきておりますが。しかし、その中でも自然とのかかわりとか、農業を含めた、そういったきちとしたバックボーンのある高齢者がいることが、地域を発展させる非常に大きなものである。

実は、私どものところで主婦の方とか、小児科の先生、地元の人ですよ。そして農業者、さらには役場で子育てに関する部分を含めて保健師として活躍している人、こういった人たちが「地域で支える子育てシンポジウム」をつい先日やりました。その中で、都市と地方の交流が将来の農業発展の要になるという主旨で、奈井江町で実際に行った交流事業について、農業者のシンポジストが話をしました。札幌の親子に田植えに参加していただいた。こんなに札幌市の子どもたちが参加してくれるなんて思わなかった。お母さんと一緒になって田んぼに入って、泥の中で本当に遊ぶようにというか、仕事と遊びとを大切に、手で植える。まっすぐ見るんですけども、子どもたちはグネグネ曲げてしまう。それでも良いのです、と農業者は言います。そして、秋には収穫に来ていただいた。バス2台で、こんなに大勢の人たちが農業に興味を持っている。そして、育てる喜び、植えた喜び、そして、収穫の喜びを分かち合う。こういうことの都市との交流を一極集中だとか、地方は衰退しているということだけを指摘するのではなく、先ほどから話がありますように、自らの努力をどういうふうにしていくか。我々もその責務を負っているわけですから、札幌にばかり集中するなと言ったら、逆になお集中する可能性がありますから、むしろ、自分たちで行動を考えて起こすことが非常に大切ではないかなと思います。したがって、この面についてももっと今後多様な地域の取組を重視していかなければいけないだろうと、こういうふうを考えます。

それから、今、狩野委員からお話がありました。奈井江のことをちょっと言っていたんですが、本当にそのとおりでございます。奈井江町の企業が非常に活躍しております。今まさにいざなぎを超えるというので、我々は実感がない、実感がないと言いますが、つい先日、私は企業をずっと回ってまいりました。その実感がその中でわかりました。ということは、北海道住電精密さんとのつながりの深い企業が独立して、新社屋を建てました。素晴らしい社屋です。北海道にもあれだけの明るくて、しかも、作業のしやすい、勤労者が本当に喜んで働いているような環境整備された素晴らしいところでございますが、この企業が倍増、倍増してきております。さらに、今その本拠である北海道住電精密が、トヨタさんの大変なご協力もあってだと思っておりますが、完粉工場を今増設いたしておりますし、そして、トヨタとの企業連携で製品の増産を図りまして、年間の生産額も100億円を初めて超える。先日も、社長さん、幹部の方々と私は話し合いをいたしました。誇らしげにその話をしていただいて、私も本当に元気づいておるところでございます。また、北海道電機、これは南山部会長さんが関連する企業でございますが、これも蓄熱暖房で今

燃料がものすごい高くなっておるんですね。石油を含めてですね。ですから、そういう意味で蓄熱暖房といいますか、電気を通じて暖房をすると、このことがものすごい需要がありまして、増産されておる。まさに内需のいざなぎ景気を超えるこの実感を初めてわかりました。いずれにいたしましても、そういう道央地域でも、しかも、取組み方によっては、相互関係でこういうことが発展していく、企業の立地がぜひ広まっていくことを、我々は自信を持ってやる必要があるのではないかなと、こんな思いをいたします。

それからもう一つ、ちょっと時間が長くなりましたが、17ページになりますけれども、地域連携会議で私は指摘したことがございます。これは非常にいいことなんです。計画も開発も含めて、皆さん多様なニーズを語り合って、しかも、提言型になりつつありますが、市長、町長だけで、いわゆる道も参加してはいただいています、民間の地域づくりを一生懸命やっている人たち、頑張っているぞと。あるいは地域産業を発展させよう。企業等で活躍されている方、こういった人たちをそれぞれの町から呼びながら、市町村長と語り合う。ただし、市長、町長だけの提言だけでは、いかにもつくられたような提言になってしまいますから、こういう幅広い取組が必要ではないかなと、こういう感想を言って、以上でございます。

南山部会長 ありがとうございます。

それでは、櫻井委員をお願いします。

櫻井委員 まず全般的には、パブコメの件数の話が少しございましたけれども、私の印象では、意外と多いなというのがあって、パブコメの意見がたくさん出るときは、わりと危機感を持っている一定の集団が、業界の方とか、そういう人たちが危機感を感じる時にわりと出してくるというのがあって。あと、対立する業界があったりすると、また反対のパブコメが出てきますが、そういう意味では当事者意識を持っていらっしゃる方々がこういうふうにいるのかなと理解しております。それをダイレクトに反映させるのがいいということでは必ずしもないと思いますけれども、そういうものをのんだ上で、もう少し広い視野からどういうふうに北海道の開発を考えるのかということで、行政としてはレスポンスしていけばよろしいのではないかと、全体的には思っております。

対応(案)についてでございますけれども、1つは8ページですけれども、北海道開発の「開発」は時代遅れじゃないかとか、特別扱いする必要はないんじゃないかという書き方については、これはまさに反対意見が出てきたわけですけれども、文章としては、前半の部分でかきかっこ付き(「」)でビビッドにこういう批判があると書かれているところは、むしろこういうのは出したほうがいいので、こういう意見があることをむしろ出した上で、しかし、そういうことを踏まえてやっていくんだという思想を示されているということで、これはこういうふうに書いたらよろしいんじゃないかと思っております。

それから14ページですけれども、ここも先ほどお話がありまして、都市圏の機能強化の話ですけれども、感想としては、都市圏の機能強化のところの青字のところは、その他

の地域が出たところですが、これは一応読めば、何となくはわかるんですけども、日本語としては結構抽象的で、少しわかりにくいなという、何が言いたいのかなというの、ちょっとわかりにくいということが1つです。

それから「コンパクトなまちづくりについて」は、これは両論があったことなんですけれども、一応都市再生の文言を使って、地域が自ら考えると、行動するという言葉を入れたというんですが。先ほど来のお話もあるように、ある種の北海道はちょっと予算も削られているみたいな話があって、それから、まだ明るい展望じゃないんですよ。そういうときにどうするのかというときに、頑張りなさいよというのが出てくるのは自然ではあるんですけども。ただ、都市再生特別措置法は、あれは完全に違う原理の政策が2つ全く並んでおります。別に矛盾していてもいいんですけども、デュアルなシステムになっていますよね。だけど、どっちが本則なのかということを見ると、それはおそらく改正前の特別措置法に書いてあったような、民間が活力みたいなことにダイナミズムに委ねて、それにうまく行政がサポートしていった地域活性化するというのがやっぱり本則なんだと思うんですね。ですので、そういう意味ではこういう文言は後者ですね。どっちかというと弱者救済的な発想だと思うんですけども、改正後に入った新しい異質の原理に基づくワーディングということになりますので、地域が自ら行動するというふうにしたとしても、そこで自ら行動できる実力があれば、そういう活力があり、そういう将来性がある地域は、たぶん選択と集中で限られると思われまして、中期的にはそういう話になってくるはずなので、全体的には、そういう弱いところをどうするのかということはやっぱり一番大きいテーマになってくるということは申し上げておきたいと思います。みんな助けられないというのが前提ということになると思います。

それから、それとの絡みで17ページで、主体のところでは企業を入れられたのは、そういう意味ではきわめていい話で、もう少し公とか、NPOとか、それから住民に幻想もあるので、そこらへんは元気のある民間をどうやって使っていくのかという方向としてはあって然るべきではないかと思えます。

それから、最後に1点ですが、19ページですけども。19ページの2「・」目で、「法治国家であるにもかかわらず...」がありますけれども、ゼネラリストを入れたほうがいいというのは、私もそう思っています。北海道関係者ばかり入れると、あまり正当性がなくなるかなというのがあるので、こういう方向で、もう少しゼネラリストで参加してくださる方を少し開発されるとよろしいんじゃないかと。ただ、先ほど田中先生には小さい話だと言われたんですが、行政学と書いてあるだけけれども、委員の中に行政学の方はいらっしゃらないと思うんですね。ひょっとしたらいらっしゃるかもしれませんが、私は行政法ですので、行政法と行政学とは全く違います。それは事務局の方はわかりだと思えますが、行政学はむしろ行政内部に入って、工学的なビヘイビアをとられるというのが私のイメージでございますけれども、法律学者はその中身に入らないというところが売

りです。第三者的に距離を持って意見を言うということが独自性でございますので、これは行政法を体系的にとかというふうに変えないと、法治国家と行政はあんまり関係ないので……ということで、これがコメントでございます。

以上です。

南山部会長 ありがとうございます。

それでは、田中委員お願いします。

田中委員 今の話と少し流れをつなげながらいくと、全般的に私も今回の資料2の3ページ目の道北から12%ご意見をいただいているというところ、そこに対してどの程度実際に現地を拝見させていただいて、うまく対応できているのかという気をしながら思っていました。その中では、全般に地域の特性を幾つかちりばめていただいたので、よいと思っただけですけれども。最終的には、コンパクトシティなり、あるいは活力ある本業を伸ばすときの対置をどうとらえていくかというのが、やはり今後の課題なのだろうなという気はしています。

今回の趣旨に沿って2点コメントさせていただきますと、1つは、私一応防災というところで対応させていただいているので、16ページを拝見いたしました。樽前山、駒ヶ岳、前回の委員会の後調整させていただいて残させていただいたわけですが、「特に」なのか、「その際」なのか、ちょっとひっかかる。つまり火山対策の1つとして交通の長期的な影響を考えなさいということなんだと思うので、「また、活火山等における火山災害対策を推進することが必要である。特に」という表現なのか、「その際」なのかなというのをちょっとご検討いただければと思いました。

それから、これは専門外のことで恐縮なのですが、今改めてパブリックコメントの対応で見させていただいた中で、1ヶ所ひっかかったところがございます。ちょっと場所が埋もれてしまったのですが、資料3の30ページの四角で囲ってある下から4行目の後ろから始まっているところです。「高齢者、身体障害者等のハンディキャップを負った人々の社会参加を困難にしていることから」と。これは一般向けのものなのでよいのだと思うんですが、ハンディキャップという表現自体は学問的には、かなり特殊を扱われ方をしているもので、よく読めば要らないではないかと。片仮名が多いという批判もございましたので、「高齢者、身体障害者等の社会参加を」というところで、できれば、ここに「より」を入れておいていただければと。「より困難にしていることから」と。つまり、厳密に言うと、インペアメントであり、サビリティーという表現を使うべきなのかもしれないというところでもあります。

以上、2点でございます。

南山部会長 ありがとうございます。

それでは、根本委員お願いします。

根本委員 根本でございます。まず、関係者のご苦勞に敬意を表したいと思えます。

その上で2点なんですけれども。1点目は、資料2の14ページでございまして。先ほど来出ております一極集中の話なんですけれども、これは札幌市集中開発の対応(案)の青線の修文のところなんですけれども、札幌市を中心とする都市圏との連携によってというのは、そういうやり方もあるんですけれども、都市圏と連携しないで独自にやるというやり方が、北海道の場合はリアリティーがあるのではないかなと。知床と札幌市が連携するのはあるとは思いますが、ちょっとぴんとこないですね。だから、面的に非常に広いがゆえに、独自に自分の力で全国・全世界へ発信できるということが非常に特徴で、それは非常にいい利点だと思いますので、その他の地域のように、単純に一極集中を促進するのがいいということはないと思います。そういう意味で「都市圏との連携」を削ってもいいかなとは思いますが、活かすとすると、「札幌市を中心とする都市圏との連携による相乗効果や、全国・全世界と直結できるような地域からの発信力の向上を図る」という選択肢を与えるという書き方がいいんじゃないかと思います。それが1点目です。

それからもう一点は、17ページでございまして。連携・協働の話です。これはパブリック・プライベート・パートナーシップのことだと思うので、ご参考までにですが、本日の『日経新聞』の「経済教室」に私の文章が出ていますので、ぜひお読みいただければと思いますけれども、そういう意味で企業を入れるのは大賛成で素晴らしいなと思います。役割を入れるのも素晴らしいなと思います。単純に仲良しクラブではなくて、役割と責任はこのとおりでありますので、協働といわれると、NPOとか企業は、官が責任を放棄して民間に投げているというふうに取りますが、そうじゃないと。官も役割・責任を持つという、そういう意思表示でいいんじゃないかと。ただ、役割と責任というふうには、ちょっと通常は言わなくて、これはアンドでは結ばれないので、「責任ある役割を担って」というふうに言うことが多いかなと思いますので、そのほうがいいんじゃないかと思います。

それから重要なことなんですけれども、施策の実現に役割を担うというのは、実現だけかということなんです。パブリック・プライベート・パートナーシップは、意思決定に企業なり市民が参加するということは非常に重要で、官が決めたものの実行だけを一方的にNPOや企業に委ねても、効率的なことではできないんですね。最初からNPOや市民や企業が目を見て何が必要かということと言えるような、そういう場を与えないとよくないんじゃないかなということで、今、例えば千葉県の我孫子市なんかで、住民やNPO団体が市の施策、市の全事業を対象に、自分がやったほうが効率的だと思うような提案をできるという制度を進めています。来週の火曜日にその結果が発表になりますが、それは細かな話なんですけれども、そういう機会を与えることが必要なので、2行目の「それぞれが」の後に、「それぞれが具体的な施策」政策の大枠は国や道が決めればいいんですけれども、「具体的な施策の決定に積極的に参画するとともに、その実現に」というような形でやっていくのが必要ではないかと思います。

以上、2点でございまして。

南山部会長 ありがとうございます。

それでは、濱田委員をお願いします。

濱田委員 ゼネラリストが必要だという意見があったそうですが、専門家を満遍なく並べればゼネラルなことになるんじゃないかと私は思っています。私の専門のところの一つコメントを出したいと思います。

それは資料3の23ページです。「金融機能の強化」がありますが、そのパラグラフの「また、」からなんですけれども、「内外の資金交流」という言葉があるんですが、この言葉が入ったのは、その下に が付いているコメントがあったからだということになっているんですが、「内外の資金交流」は何のことかわからないし、その次に書いてあることと内容が違うのですね。「対内直接投資」は、たぶんどこかの企業が北海道に立地するような、そういうイメージを持たれていると思うんですね。それと「内外の資金交流」ということがしっくりこないということがあります。

北海道に外部から資金が入ってくる必要があるのかということ、現状ではそうではありません。私はここで何回か発言したと思うんですが、預貸率構造を見ますと、65%ぐらいしかありませんので、むしろ北海道は何かやる人が来てくれたときには、十分な資金手当を民間でもつけられるような状態にあるはずであります。言葉の意味もよくわからないし、パブリックコメントにもそういう言葉はないので、ここの「内外の資金交流」というのは外したほうがよろしいのではないかと思いました。

それから、専門ではないんですが、同じ資料3の13ページですね。それと19ページにもあるんですが、修文したところで、「戦略性を持って」「戦略的」というような言葉が、新しくなった原案では随分書かれていると思います。例えば13ページの線を引っ張ったところの4行目ですね。「戦略性を持って」と。それから19ページの「産業立地基盤の強化」の一番最後にも「戦略的な基盤整備を」というのがあるんですが、「戦略的」という言葉は非常に便利な言葉なんですけれども、「戦略的である」と言った瞬間に「あなたの戦略は何ですか」というふうに当然聞かれるわけですから、少し書くのなら、中身を書いたほうがよろしいかなと思いました。読んでみますと、ここで「戦略性」という言葉を使っている意味は、たぶん集中と選択ということだろうと思います。そうでないかもしれませんが、少し中身を書いていただければと思いました。

それから資料2の9ページの現実にコメントがあった部分ですけれども、9ページの(3)。これ1点しかないんですが、「北海道の厳しい経済状況について」で、格差が全国と北海道で拡大しているというコメントが出ています。それに対して対応(案)で、「第6期計画期間中の社会経済情勢は、厳しい状況で推移した。」と書かれているんですが、全国と北海道の景気回復状況が乖離してきたのは、2002年ぐらいからの景気回復局面において特に著しかったので、第6期計画期間中と言うと、やや広がり過ぎかなと思っています。この格差のことは非常に大きな問題なので、現状認識のところでは取り込むこと

には賛成ですが、その対応の書き方を工夫していただきたいということでもあります。

それと、これが一番大きな問題なんでしょうが、開発の新しいやり方、開発の概念が進化したということに随分パブリックコメントが寄せられておりますが、それについては、もしたたき台について議論する時間がありましたら、そこで申し上げたいと思いますが、パブリックコメントについては、多くの方がおっしゃいましたけれども、直接民主主義は非常に手間と時間がかかると。それを取り込まれたご努力は大変なものだろうと思っております。私はいつも実はパブリックコメントを書く側に回っていて、あちこちに書いているんですが、こういうふうに親切に対応するところはあまりないと思います。私がパブリックコメントを書いても、ほぼ原案どおりに発表されるのが普通でありますので、当局は非常に親切な対応をしていると思っております。

以上です。

南山部会長 ありがとうございます。

では、山内委員お願いします。

山内委員 これまでの各委員の先生方から大変適切なコメントをいただいたと思いますので、私は、私の専門のところでも1つだけ意見を述べさせていただきたいと思います。

今、私は函館にいますけれども、函館で、函館国際水産海洋都市構想と言って、地域の再生を願って今動いているわけです。我々が考えていますのは、地域だけじゃなくて、アジア全体を含めた国際貢献も実は入っているわけです。そういった意味で、我々は函館国際水産海洋都市構想、その中核になっているのが我々の大学です。そこが中核になって、産学官連携で都市再生を図っております。これは内閣府の都市再生計画なんかに認められておまして、内閣府のサポートもあるんですけれども。我々はこれからの水産を考えていく場合には、北海道、日本だけで考えてはたち行かないだろうというので、アジアを巻き込んだ水産を考えていかなければいけないというのが我々の考えです。

我上海がその一つのターゲットであります。昨年、函館の産学官を引き連れまして、上海でシンポジウムを開きました。それは日中産学官連携をやりましょうということです。上海市政府がそれに非常に賛同していただきまして、上海は食料の供給問題がこれから大変なんです。というのは、上海を含めた沿岸域は、年間に人口が1,000万人増えているんですね。そのうちに上海市は、1年間に上海市だけで100万人口が増えているんです。この15年間で1,000万人口が増えます。そうしますと、結局、これは食料の配給システム、供給システムをどうするかというのが非常に問題なんです。1つは、それだけ人口が増えているのは、近隣の農村の人たちが農業を捨てて街に入ってくる。漁村の人たちも漁業を捨てて入り込んでいるわけです。そうしますと、もう食料が足りない状態になってきましたので、だんだん輸出国だったのが輸入国になっているのはご承知だと思います。そういった中で、我々が産学官連携をすることによって、それから我々の場合は水産ですので、水産物の食料供給をどうするかということで、我々が上海市と日中産学官

連携をやりましょうと。水産物の食料供給システムをお互いに考えましょうということで訴えたら、非常に賛同を得まして。上海市政府がすぐ日本円に換算すると3年間で4,500万の研究費を上海市がつけてくれました。そういうことで今始まっておりますが、実は、また今週も、上海市政府に呼ばれて、函館市が推進している函館国際水産海洋都市構想の話をしてくれということで、私講演に行きました。相手は上海市政府の人たちをターゲットにして話をしましたが、そこでも非常に賛同を受けまして、これから産学官で上海市と函館市の連携を組んで、お互いに食料をどうするのかということで考えましょうということです。

今、中国は世界で第1位の漁業生産国ですけれども、そのうちの7割が実は養殖魚なんです。ですので、養殖魚を食べてもらわないと中国の食料の供給はできない。ところが、今どんどんお金持ちの人たちが増えていきます。年収3,000万の人たちがもう5,000万は超えたということです。だから、日本人の半分の人が、実はもう3,000万の年収を稼いでいるというのが今の中国の実態なんです。その人たちが海産物がおいしいことに気がつき始めたので、養殖物を食べなくなってきているんですよ。それと同時に、養殖物が、やはりちょっと危ない養殖をしているというデータが徐々に始まったものですから、非常に上海市が慌てて、そして、我々と一緒にやりたいというのは、安全・安心な水産物のシステムを共同で開発してくださいということです。

ということはどういうことかといいますと、おそらく日本で30~40年前に始まった食料供給システムが今中国で始まるようになっていきますので、我々が函館市とか道にも言っていますのは、今まで水産の加工技術も含めた、鮮魚の保持システムを含めて、結局、日本がかつて非常に有用だったけれども、今はどっちかというあまり表に出てこないような技術を中国に持っていくと、これから大きな商売ができるんです。しかも、それも我々は経験したことです。出口も大体想像ができるというような状況の中で、我々がどのようにその社会の中に入ってくることによって、その社会形成の中で、我々が貢献していくのは非常に重要だろうと思うんですね。そういった中で、実は北海道の非常に安全・安心な水産物を売り込むことも同時に出てくるだろうと思いますので、そういった意味で函館で立ち上げた函館国際水産海洋都市構想は、実は中国にも非常に影響を与えているということです。

上海市は、上海水産大学があるんですけれども、それは上海市のダウンタウンにあるんですね。それを沿岸域に持ってくるということで、今、高速道路をつくりますと言ったら、3年ぐらいであつという間に高速道路をつくったんですね。それができたので、今度は大学を整備しますと言ったら、大学がずっとつくられていて、2年後には移るといいますね。しかも、その大学だけで300億の予算をやって、国際的な海洋都市構想をやる。その海洋都市構想のモデルは函館だということで、私が招待されて講演したんですね。

ということで、資料3の31ページに「活力ある地域社会モデルとして」と書いてあり

ますけれども、水産でもそういうふうな地域社会のモデルとして水産というものが1つ立ち上がっているんだということはぜひ強調していただきたいと思っています。ずっと書かれている内容は、水産というのはチョコチョコ出てきますけれども、多くの場合はどっちかという農業が主体で書かれています。これだって、「田園コミュニティ地域の形成」といいますけれども、実際に水産でコミュニティが形成されようとしていて、それが外国にも影響を与えているんだというような、非常におもしろい産学官連携のコミュニティができていますので、そういったことを強調していただきたいと思います。

この構想の中核になっているのは、函館にあります函館ドックの跡地をそこでやろうとしていますけれども、そこを使うためには、ドック跡地の堰堤がだめになりましたので、そこを整備しないとできないということで、開発局で予算をつけて整備することになっております。そういったインフラの整備が、地域社会に実際に非常に大きな影響を与える非常にいい例だと思いますので、是非そのところはわかるように書いていただければ、我々の今後の展開として非常に役立つと思いますので、私の専門からのお願いとして、その1点だけ申し述べさせていただきます。

南山部会長 ありがとうございます。

それでは、山本委員お願いします。

山本委員 今、森林とか環境という立場から申し上げますが、今回のこのパブリックコメントに対する対応として、特に私としては異存がございません。中でも第 4 章のところ、アイヌ文化について新たに触れられたことについては賛成いたします。

これは細かい字句の問題で、本来、中間とりまとめのところでご指摘しなければいけないことなんです、ちょっと気がついたことを2、3指摘しておきたいと思います。資料2で言いますと、12ページに出てきます集成材産業の関係のところ「集成材原板」という言葉が出てくるんですが、これは専門の方にはわかるかもしれませんが、一般の方向けにはちょっとわかりづらい表現かなと思います。原材料とかそれぐらいのことに言っておいたほうが、一般の方にはわかりやすいのではないかと、そのように思いました。

それから次の13ページに出てくる表現で、これまた日本語の感覚の問題ですけれども、「自然との共生」という言葉がタイトルにあります、私の捉え方は、共生は生きもの同士の関係だと思えます。「自然との共生」という言葉には違和感はないんですが、その後に「自然環境と共生」という言葉が何回か出てくるんですけど、自然環境は保全というふうな言葉になるんじゃないかなと。そのへんのところを「共生」という言葉の使い方にちょっと違和感を持ちました。

それから、これは作業ペーパーのところに出てくるんです、同じところで「花粉症リトリートツアー」という言葉が出てきて、今回新たにその注を加えていらっしゃるんですけど、花粉症は厳密に言うと、スギだけではなくて、ヒノキとか、あるいは北海道でもカンバ類の花粉症もありますので、正確に言うと、スギ花粉症のツアーじゃないかと思いまし

た。

あと、大筋この方針に特に異存はありませんが、もう一つお願いとして、これだけの計画をあとは実行に移す、現場に戻すことをぜひ当局としてもしっかりやっていただきたいと。今回いただいた予算の内示の結果をみますと、森林の整備というところだと、前年度と比べますと、かなり予算も減っております。このへんのところをしっかりと整えていただきたいというところです。

以上です。

南山部会長 ありがとうございます。

それでは、家田委員、対応の在り方を中心にご意見をお願いします。

家田委員 どうも遅くなりまして、申しわけございません。

大変な作業を出してくれたほうにもありがたい話だけど、まとめてくれたほうもさぞかし大変だったろうなと感服しております。2と3をさらっと拝見したわけですが、非常に誠実な対応をされているなという印象を持っております。その上で感想を申し上げるんですが。

1つは、どういう方々からのコメントか、どういう立場の方々からの千件なのかが必ずしもよくわかりませんが、主として北海道の人、ほとんどが北海道の人ですが、北海道の人であるがゆえのある意味思い入れが強すぎるというか、ちょっと語弊があるけど、被害妄想的な感覚の発言も入っていたり、もうちょっとやわらかく言えば、総体化して見えてないような面がまだやっぱりあるんだなという面、それからここにあるいろいろな批判があるということは書いていただくのは大いに結構で、僕はもちろん賛成なのですが、そういう批判を冷静にかみしめてみようというところがやや欠けているなという感触は持ちましたね。千人の人がですよ、皆さんがじゃなくて。

そんなことを踏まえて、もう少し充実したほうがいいんじゃないかなと思ったのは、本文の中の「歴史と現状」と書いてあるところがあるんですが、後ろの付属資料が何かでもいいと思うんだけど、もうちょっと書き込んだほうがいいかなという感触を持ちました。その要点は2点ほどあるんですが、1つは、国が関与してきたことの必然性と意義が書き込みが弱いかなという感じですね。やっぱり誤解が千件の中にもあったんだけど、国と言うと、何か本州と誤解しているらしくてね。国が関与するというけど、本州が北海道のことがわかるはずはないみたいなことを言っているんだけど、そうじゃないんですよ。国家というものの視点に立ったという関与のことが少し弱い。それは国防もあり、何だかなだあるわけですが、

それからもう一つは、夕張の問題にも見られたように、一時期エネルギー基地としての大発展があったんだけど、その逆に裏腹のハンディキャップを負っているというところは、何か新しい人だとあんまり気にしないのかなと思うぐらいに、あんまりコメントに見えてないですよ。そういうこともきちんと書いておいたほうがいいと思います。それが

1点目です。

それからもう一つは、今、上海と水産のお話を承ったことにも大いに関係する、私もそれに同感なんです。魚そのもののことというよりは、もう少し一般的に申し上げますと、要はグローバル化というキーワードで現状認識が書いてあるけれども、少し少なく、アジアの主として中国の経済発展と、それからあわせて国際輸送ですね。海上輸送と航空輸送の整備と効率化がもたらした結果として経済がグローバル化しているわけですよ。それは決して吸い取られちゃうということだけじゃなくて、生産について言えば新たなチャンスを生むこともあるし、それから、人が行き来してお互いの地域を楽しんだり、文化を交流したりする。そういうチャンスでもあると。そこをもう少し強く書いたほうがいい感じを持っています。

それに関連してさらにもう一点書き込んだほうがいいと思っているのは、従来の北海道開発というものの基本的な精神は、いわば北海道という日本の国土の非常に重要な一部をその中において、日本の国家において見て、そして、中の中でどういうふうにやったらいいかということに終始してきたとっては何ですけれども、そうやってつくってきたわけですよ。だけど、今やそれを乗り越えて、アジア圏という中で北海道がどのような役割を果たし得るのか。どのようなチャンスを楽しむことができるのか。そういう視点から北海道の開発を再確認していくべきだというようなところを、グローバル化のところにあわせて、もう少し書き込む余地があるかなというような感想を持ちました。

以上でございます。

南山部会長 ありがとうございます。

それでは、以上で皆さんから一通りご意見をいただきました。若干時間がありますので、もしそのほかで言い漏らしたことが、あるいは作業ペーパーには一応今までのいろいろな中身が全部入っており、反映された案になっているわけですから、何か特別なご意見とかあればお伺いしたいと思います。

よろしいでしょうか。

それでは、この場ではご意見がないようでございますので、一応この場の議論は終了させていただきますと思います。大変熱心なご意見をいただきまして、本当にありがとうございました。さらにお気づきの点があれば、大変恐縮ですが、今年中に、年が変わる前に事務局に、どんな手段でも結構です、ご連絡いただければと思います。事務局としては、年明け早々にすぐ作業を開始したいということでございますので、よろしく願いいたします。

本日いただきましたご意見を踏まえまして、基本政策部会としての最終報告をつくります。そして、分科会に報告したいと思っております。いろいろご意見をいただいたにもかかわらず、大変恐縮ではありますが、部会としての最終報告としては、本日全体として了承ということで、細部の修正等につきましては、私にご一任願いたいと思っておりますが、よろ

しいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

南山部会長 ありがとうございます。

それでは、そのようにさせていただきたいと思います。

以上で、本日の議論は終了したいと思います。

本日は、基本政策部会の最後ということもでございますので、私から一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

昨年の12月に第1回ということで、先ほど何人かの委員の方がこういうことは初めてなのでというお話がございましたが、私も実はこういう立場で何かするのは初めてで、しかも、何となく難しい時局であったので、どのように議論が進むのか心配しておりましたけれども、皆さんご多用の方ばかりの中、本当によくご出席をいただき、それぞれの専門の分野からいろいろなご意見をいただきました。本当に厚くお礼を申し上げます。おかげさまで、中間とりまとめを了承いただいた後、パブリックコメントをすることができ、本日はその議論をいただきました。この結果を踏まえて報告書をつくっていきたいと、先ほど申し上げたとおりであります。

北海道開発分科会は、来年の2月に開催される予定であります。この分科会で報告をさせていただきます、そして、この分科会で、基本政策部会の議論を後に、新たな計画の在り方についての最終報告をつくるということになっております。部会の場を通じていろいろ議論がありましたけれども、人口問題といい、自然環境問題といい、エネルギー問題といい、日本だけではありませんが、世界的に見ても、この10年前後、非常に大きな変わり目にある、時代が大きく変わっていることが、皆さんの共通認識だったかと思います。我々の日本はもちろんでありますし、北海道もその例外ではないわけです。こういう時代の変化を乗り切るために、やはり大切な10年間、この平成19年度には最終報告書の下に、北海道の方向性を決めることになる新たな計画の策定作業に入ることになります。この報告書の下にこの難しい転換期を乗り切るため、北海道がどうあるべきか、そして、いかに国に貢献し、自分たちの発展は明るいかということが、具体的な戦略が描かれることを、私もお伝えをいたしておりますし、望みを持っていきたいと思っております。

最後に改めまして、長い期間にわたりまして、ご参加をいただきました、委員の皆さん、関係者の皆さんに厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

それでは最後に、品川局長からご挨拶をお願いいたします。

品川北海道局長 本日のご審議ありがとうございました。

また、本日は本部会の最終開催ということでございますので、一言御礼を申し上げたいと存じます。

本部会は昨年12月の第1回の開催以来本日で9回まで、南山部会長を初め委員の皆様には大変ご多用な中、また、遠路をお集まりいただきまして、貴重な、そして、それぞれ

のご専門の分野から忌憚のないご意見を賜りました。限られた時間の中でおとりまとめいただきましたことにつきまして、厚く御礼を申し上げます次第でございます。

本日報告させていただきましたとおり、パブリックコメントは、計画への期待とか、地域の実情などを踏まえまして、私どもの予想をはるかに超える数の意見をいただいたところでございます。改めて北海道の行く末についての関心の高さといいますか、そういったものを感じているところでございます。本日の審議を踏まえまして、私どもとして、その結果と対応方針について、できるだけ早く公表をさせていただきたいと考えてございます。また、来年2月には北海道開発分科会におきまして、部会報告に基づきまして新たな計画の在り方等について、報告として取りまとめいただく予定といたしております。

また、私ども行政内部ではございますけれども、政策レビューというものもございまして、この部会報告に従いまして年度末までに省議決定に努めてまいりたいと考えてございます。さらに19年度になりましてからになるとは思いますが、具体的な計画の内容とか、施策を検討いたしまして、また、関係省庁との調整を進めながら、最終的には計画の閣議決定を目指して取り組んでまいりたいと思っております。私どもとしては、北海道、私どもが進めます施策のグランドデザインあるいはこれから参画をいただく方を含めて、メッセージとしてできていけばいいなと考えてございます。

委員の皆様には、今後ともご指導くださいますようお願い申し上げます。

なお、お手元に、先ほどご紹介がございましたが、昨日内示されました予算内示の概要が付けてございます。後ほどご覧いただければと思いますが、私どもとしては、国の財政あるいは地域財政が非常に厳しい中ではございますけれども、こういう中であっても、北海道の成長力あるいは競争力を強化する政策の推進、そして、安全・安心に暮らせる地域を実現する施策等に支えていきたいということで考えてございます。一層のご指導をお願いしたいと思います。

以上をもちまして、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

南山部会長 ありがとうございました。

それでは、これもちまして基本政策部会を閉会させていただきます。長時間にわたりありがとうございました。

閉 会